流れ者

―能『隅田川』より

大塚健太郎

流れる

能『隅田川』より

そこで松尾芭蕉がのんびりと煙草を吸っている。
風はなく、吐き出された煙はなかなか消えないで、とどまっている。
沈黙。

芭蕉

「僕あの、松尾芭蕉っていうんですけど、今から旅に出ようと思ってて、旅人になろうと思ってるんですけどね。いや、去年の秋頃に、一回やって旅を。でまあ戻ってきたんですけど、この隅田川のほとりにあった、我が家っていうか、あばらやっていうか。まあ、もう売っちゃったんで違うんですけどね。とにかく戻ってきて、で、そしたら、なんか蜘蛛の巣とか張ってて、なんでだよちくしょうとか思いつつ、それで久方ぶりに腰を下ろしたっていう、感じだったんですけど。ただ、あの、また春になったじゃないですか。そしたらやっぱり、まあ旅したくなるというか、そわそわしちゃって、もう何も手につかないんで、もう行っちゃえと思って。松島とかいって、月とか見たいなと思って、そう。まあ、言っても遠いんでね、こう、遥かな気持ちになるっていうか、そんな感じですけど。でもまあ、まさしく出発しようと思ってて、まあそれで、今はこのまあ、船着き場みたいなとこなんですけど、まあ要は、船、出発するの待ってるんですけど」

そこへ河合曾良やってくる。
曾良、芭蕉とはスタンドを挟んで対照的な位置までくる。
曾良、煙草を探す。
しかし、どうやら忘れてしまったようだ。
ほんのすこしだけ気まずそうにして、曾良、芭蕉に煙草を求める。
芭蕉、応じて、煙草を箱ごと曾良に渡す。
曾良、ありがたがって煙草を抜き取り、そのまま箱も自らのポケットにしまってしまう。
沈黙。
そして曾良、ライターを探している。
芭蕉、煙草が返されないことに気づき、煙草を返すよう曾良に求める。
曾良、気づいて、煙草を芭蕉に返す。
曾良、ライターを探しているが、どうやら持っていない。
芭蕉、気づいて、曾良にライターを貸してやる。
曾良、微妙にありがたがるそぶりをした後、芭蕉から借りたライターで煙草に火をつける。
芭蕉、曾良のことを見ている。
ごく自然な動作でライターをポケットにしまおうとした曾良だが、芭蕉の視線に気づき、ゆっくりとライターを取り出して

芭蕉に返す。
微妙に笑いあう二人。
ようやく二人は本来向いていた方に向き直ったかと思われたが、曾良、火をつけそびれていた。
曾良、申し訳なさそうに芭蕉の方を向き、再度ライターを求める。
芭蕉、ライターを取り出して曾良に渡す。
曾良、受け取って、火をつけようとする。しかしなかなか火がつかない。
芭蕉、やや呆れたようにして向きなおす。
曾良、ようやく火をつけたかと思うと、至って自然な動作でライターをポケットにしまう。
沈黙。
芭蕉、気づけば旨そうに煙草をふかしている曾良の方を見る。
もはや声をかけづらい。
芭蕉、ためらっていると、

曾良　「（気づいて）寒いですね」

沈黙。
曾良、返事がない芭蕉の方を向いて、

曾良　「寒く、ないですか」
芭蕉　「……ああ。そうですね。寒いですね」
曾良　「（なんだ、というように頷いている）」

芭蕉、話しかけるタイミングを伺っているが、

曾良　「もう三月なのにねえ」
芭蕉　「……ああ」

沈黙。

芭蕉　「あの……」

やや間があった後、

曾良　「あ、はい」
芭蕉　「ライター……」

やや間があった後、曾良、しまった、というようにして、ライターを探す。
微妙に笑いあった二人、前を向きなおし、黙って煙草を吸う。

沈黙。
ふと曾良の方を見る芭蕉。
そして、

芭蕉　「あの……」
曾良　「あ、はい、あ、（まだ何か返し忘れているかと思い探し出す）」
芭蕉　「あ、じゃなくて……」
曾良　「……？」
芭蕉　「曾良くん？」

間。

曾良　「ああ」
芭蕉　「なんだ、曾良くんじゃん」
曾良　「ほんとですね」
芭蕉　「なんだよ、なんか気づかなかったよ」
曾良　「そうすね」
芭蕉　「うん、イメチェン？」
曾良　「や、イメチェンってか、そうすかね」
芭蕉　「えてかなんかほんと、よろしくねなんか一緒にとかごめんね誘っちゃって」
曾良　「や全然ですよ」
芭蕉　「ほんと？」
曾良　「や全然ですよほんとに」
芭蕉　「あ本当」
曾良　「はい。東北とか行ったことないんで楽しみですね」
芭蕉　「え、そっか。でもそっか、なんか、そうだよね」
曾良　「はい」
芭蕉　「え、曾良くんってさ、実家とかどこなんだっけ」
曾良　「実家すか」
芭蕉　「あ、言いたくない？」
曾良　「いや、そんなことないですけどね」
芭蕉　「あ、ほんとに？」
曾良　「はい」
芭蕉　「そっかそっか」
曾良　「はい」

沈黙。

芭蕉　「え、曾良くんってさ」
曾良　「はい」
芭蕉　「旅とかするの？普段」

曾良　「旅っすか」
芭蕉　「うん」
曾良　「しない……っすねー」
芭蕉　「あ、そうなんだ」
曾良　「はい」
芭蕉　「家族でたまにみたいな感じ？」
曾良　「いや、家族旅行とかないっすねあんま、なかったっすね」
芭蕉　「あ、そうなんだ」
曾良　「はい……なんか僕、ディズニーランドとかも全然行ったことないんですよ」
芭蕉　「あ、そうなんだ」
曾良　「なんか親が全然すごい、インドアなんで」
芭蕉　「あ、そうなんだ」
曾良　「はい」
芭蕉　「ああ、まあでも、そうだよね、なんか、じゃないと僕の弟子とかないよね、インドア系じゃないとなんか俳句とか、ね、なんか」
曾良　「あ、でも自分中高はサッカーやってましたよ」
芭蕉　「え、あ、そうなの？」
曾良　「はい」
芭蕉　「えなんかすごい意外だねそういうの」
曾良　「そうっすかね」
芭蕉　「うん、すごい意外だよ」
曾良　「そうっすかね」
芭蕉　「え、なんかサッカーから俳句に転身って、なかなかこう、すごい、あれなものがあるよね」
曾良　「風流っすか？」
芭蕉　「いや……風流かはちょっとわかんないんだけど」
曾良　「あそうすか」
芭蕉　「あ、うん、なんか……」
曾良　「どっちかっていうと、侘びっすか？」
芭蕉　「侘び……？」
曾良　「はい」
芭蕉　「……そうかもしれないね」
曾良　「てか、行かないんすか旅」
芭蕉　「え、あ、うん、行きたいんだけど僕も、なんかまだお客さんまだ集まってないらしいんだよね、なんかさっき船長の人がアナウンスしてたけど」
曾良　「あそうなんだ」
芭蕉　「ていうかまあ、いずれにせよまだ出る時間じゃないしね船」
曾良　「あ、そうなんすか（時計を見る）」
芭蕉　「うん」

曾良　「え、あれ何時発でしたっけ」
芭蕉　「27分じゃない？」
曾良　「3時？」
芭蕉　「うん」
曾良　「あ、俺うわ、最悪だ、時間間違えてました」
芭蕉　「あ、そうなの」
曾良　「はい、うわ、最悪だ」
芭蕉　「最悪ってことはないんじゃない？」
曾良　「いやまあ最悪ってことはないんですけど、忘れ物したんですよ急いで出てきたんで」
芭蕉　「あそうなんだ」
曾良　「はいだからうわ、取り帰れたなあ」
芭蕉　「それはそうだね」
曾良　「はい」
芭蕉　「え、何忘れたの？」
曾良　「え？」
芭蕉　「あ、忘れ物」
曾良　「あ、おみくじっすね」
芭蕉　「おみくじ？」
曾良　「はい」
芭蕉　「おみくじ……」

沈黙。

沈黙。

曾良　「なんか、あれっすか」
芭蕉　「なに？」
曾良　「芭蕉さんって、何聞くんですか？音楽とか」
芭蕉　「音楽？」
曾良　「はい。やっぱ演歌っすか」
芭蕉　「いや聞かないよ演歌なんて」
曾良　「え、まじっすか」
芭蕉　「うん。やっぱり、そうだね……ヒップホップとか」
曾良　「ヒップホップですか」
芭蕉　「うん」
曾良　「俳人なのに？」
芭蕉　「え、だめかな」
曾良　「いやだめじゃないですけど」
芭蕉　「やっぱ韻とかたくさん踏んでくれるとさ、掛言葉みたいなもんじゃない、あれって。アツいよね、僕なんかからするとさ」

曾良　「あ、そうすか」
芭蕉　「うん」
曾良　「好きな人とかいるんですか？」
芭蕉　「そうだな……ゆるふわギャングとか……」
曾良　「え、誰ですか」
芭蕉　「あ、知らない？」
曾良　「知らないっすね」
芭蕉　「あ、そっか」
曾良　「はい。へー」

沈黙。

芭蕉　「曾良くんはなんであのさ」
曾良　「え、あ、はい」
芭蕉　「あの、僕についてきてくれることにしたの？」
曾良　「なんで」
芭蕉　「うん」
曾良　「なんで……」
芭蕉　「……」
曾良　「……」
芭蕉　「……」
曾良　「……弟子だから？」

沈黙。

芭蕉　「そっか」
曾良　「はい」
芭蕉　「だよね」
曾良　「えなんか逆になんか、ないとやばいってか、変ですかね」
芭蕉　「や、全然そんなことないけどね」
曾良　「ほんとですか」
芭蕉　「うん、ほんとに、ほんとに」
曾良　「そっか」
芭蕉　「うん。じゃあ、あれか、旅に関してはあれか、よくするみたいなわけじゃ全然ないけど、かといって好きっちゃ好きみたいな感じか」
曾良　「や、そんなことないですね」
芭蕉　「あ、ほんとに」
曾良　「はい、旅……って正直なんでするのか……わかんないっていうか……あ、いや全然、芭蕉さんみたいに、なんかご当地の句、読んでいきたいぞみたいなモチベーションあるなら全然わかるんですけどね」

芭蕉　「あ、ご当地ね」
曾良　「なんかただ趣味が旅！みたいのはなんか……純粋に謎って感じですね」
芭蕉　「なるほどね」
曾良　「なんか……あれですかね？」
芭蕉　「え？」
曾良　「いやモチベないのについてこられるとあれみたいな」
芭蕉　「え、いやいや、全然そんな、あれなんかじゃないと思うけど」
曾良　「純粋なだけタチ悪いみたいな、ブウ的なあれですかね」
芭蕉　「いや全然……ブウ的な……？ああ、魔人か。いや全然、ブウ的なあれなんかじゃないよ」
曾良　「あ、よかった」
芭蕉　「うん、ただまあ、曾良くん的に、どうなのかなあれなのかなっていう感じだけど」
曾良　「やっぱり、あれっすかね」
芭蕉　「いやいや、全然、僕はあれじゃないよ……嬉しいし……ほんとに……」
曾良　「なんか、すいません」
芭蕉　「いや全然全然！全然あれなんだからほんとに」
曾良　「すいません」
芭蕉　「いいんだよ、気にしなくても、そんなこと」
曾良　「はい」
芭蕉　「その気持ち、置いていこうよ、この場所に」
曾良　「あ、はい」
芭蕉　「曾良くんと、芭蕉の旅が、始まれり（とか）」
曾良　「……」
芭蕉　「……え？」
曾良　「いや……え……」
芭蕉　「え……？」
曾良　「いや……」
芭蕉　「……？」
曾良　「……」
芭蕉　「え、なんか……どうかした？」
曾良　「いや、なんていうか……一応聞くんですけど……今の、本気のヤツとかじゃ全然あれですよね……？」
芭蕉　「本気の？」
曾良　「はい」
芭蕉　「なにが？」
曾良　「いや……」
芭蕉　「え、なにどうしたの？」
曾良　「いやなんていうか……今……あの、三連続くらいで、五七五してましたよ……」

芭蕉　「え……？」
曾良　「……」
芭蕉　「（発言を振り返って）……あ」
曾良　「はい」
芭蕉　「いや……違う違う違う違う！」
曾良　「で……すよね」
芭蕉　「違う違う違う」
曾良　「あですよね」
芭蕉　「違うよまさか、え、うわほんとだあ、やばいね」
曾良　「なんか逆に自然になっちゃうみたいな」
芭蕉　「いやいやそっかうわ、恥ずかしいな」
曾良　「あはは」
芭蕉　「あはは」

などと芭蕉と曾良がはしゃいでいるところに女現れる。
二人、急に静かになって女の方を気にしている。
女、ライターがないのか、ポケットを探している。
曾良、芭蕉にライターを貸してやるように指示する仕草。
芭蕉、女に近寄って、

芭蕉　「あ、よかったらこれ……」
女　「（芭蕉のことを一瞥し）……いいです」

芭蕉、ごまかしつつ後ずさりして戻り、曾良を軽くはたく。
女、しばらく探した末にようやくライターを見つけ、着火しようとするが、オイル切れ。
女何度か試すが、着火しないのでライターを投げ捨てる。
煙草はそのまま喫煙スタンドにねじ込んで、去り際に、

女　「すいません」
芭蕉　「あ、はい」
女　「チケットって、次の便のとか、余ってたりしませんか？」
芭蕉　「チケットですか……ちょっとそうですね……」
曾良　「ないですね」
女　「そうですか」
芭蕉　「はい、自分たちのしか、」
曾良　「すいません」
女　「いえ」

そして去っていく。
沈黙。
しばらくして、

曾良　「どうしたんですかね……」
芭蕉　「そうだね」
曾良　「急いでる的なあれなんですかね」
芭蕉　「うん……まあ色んな旅があるからね……十人十色のほんとに」
曾良　「え、ああ、まあ、でも旅って限らないですけどね、別に」
芭蕉　「うん、まあね。でもまあ見方によっちゃね、なんでも……移動って旅だし、人生もね、旅だし」
曾良　「人生ですか」
芭蕉　「うん。人生。旅。うん」
曾良　「そうですよね」

間。
すこしして芭蕉また話し始める。

芭蕉　「まあでも、あれだね、にしても、アナウンスとか入ってもいいのにね、そろそろ」
曾良　「あ、ですよね、やっぱり」
芭蕉　「うん」
曾良　「遅れてるんじゃないですか？準備。出航の」
芭蕉　「やっぱりそうなのかな」
曾良　「はい」
芭蕉　「そっかあ」
曾良　「そうですよきっと」
芭蕉　「そうかもね」
曾良　「はい」
芭蕉　「見に行ったほうがいいのかな」
曾良　「見にですか？」
芭蕉　「うん」
曾良　「あー」
芭蕉　「案内とかね」
曾良　「あーですね」
芭蕉　「出てるかもだし」
曾良　「あー、ですね」
芭蕉　「行ってみたほうがいいね」
曾良　「あー。ですね」

間。

芭蕉　「もう出てるかもしんないもんね、案内」
曾良　「そうですね、案内」
芭蕉　「どっちかが行ったほうがいいね」

曾良　「まあ行かないと見れないですもんね」
芭蕉　「そうだよね」
曾良　「そうでしょうね」
芭蕉　「そういうもんだもんね、案内って」
曾良　「そうですね、案内はそうですね」
芭蕉　「もしアナウンスさえあればね」
曾良　「そうですね」
芭蕉　「アナウンスさえあれば見に行かなくていいんだけどね」
曾良　「アナウンスさえあればそうですね」
芭蕉　「そうだよね」
曾良　「案内はね」
芭蕉　「そうだね」
曾良　「ですよね」
芭蕉　「アナウンスってそういうもんだもんね」
曾良　「そうですね、アナウンスは、はい」
芭蕉　「そうだよね」
曾良　「そうだと思います」
芭蕉　「見てきてみようか」
曾良　「え、まじですか」
芭蕉　「え？」
曾良　「すいません師匠なのにそんな、行かせちゃったりしてお願いとかして」
芭蕉　「え、いや、」
曾良　「え？」
芭蕉　「あ、いやいや、一緒にだよ」
曾良　「あ、一緒にですか？」
芭蕉　「うん、一緒だよ」
曾良　「あ、なんだ、一緒か」
芭蕉　「一緒じゃないと思ったか」
曾良　「はい」
芭蕉　「そっかそっか」
曾良　「はい」
芭蕉　「もし一緒があれだったら、曾良くんが行ってきてくれてもいいよ」
曾良　「え？」
芭蕉　「……違うか」
曾良　「はい、それは、はい、違いますね」
芭蕉　「そっかそっか」
曾良　「はい」
芭蕉　「なんか、ごめんね」
曾良　「はい」
芭蕉　「……うん」

曾良　「じゃあ探しに行きますか、しょうがないから」
芭蕉　「うん。そうだね。しょうがないし、探しに行こうか」
曾良　「はい」

芭蕉、動かない。

曾良　「なにしてるんですか？」
芭蕉　「ごめんね、なんか」

芭蕉と曾良去る。
舞台上には誰もいなくなった。
ただ二人の残した吸い殻から、消え入りそうな煙が、しかしまだ立ち上っている。
しばしの沈黙。
やがて先ほどの女が現れ、舞台を静かに一巡。
すると、アトムが現れる。

アトム　「お母さん？」

女、そのままの姿勢で、

女　「トビオ？」

アトム、女のほうをしっかりと向いている。
間。

アトム　「僕、トビオじゃないよ」

沈黙。
女、そのままの姿勢で、

女　「そっか」

沈黙。

アトム　「どうしたの？」
女　「……ううん、なんでもない」
アトム　「でも」
女　「お母さん、探してるの？」
アトム　「……うん」
女　「じゃあ、わたしとおんなじだ」
アトム　「おんなじ？」

女　「うん」
アトム　「どういうこと？」

女、アトムのほうを向いて、

女　「僕、なんていうの？」
アトム　「名前？」
女　「うん」
アトム　「僕、アトムだよ」
女　「アトム？」
アトム　「うん」
女　「アトム」
アトム　「うん」
女　「変な名前だね」
アトム　「そんなことないよ」

沈黙。

女　「見つかるといいね、お母さん」
アトム　「うん。ありがとう。あなたも」

アトム、去っていく。
女、しばらくそのままの姿勢でいたのち、去る。
また舞台上からは誰の姿もなくなってしまった。
沈黙。
やがて天馬が舞台上に登場。
舞台前面までくると、なにか頭上のものを取ろうとする仕草。

天馬　「……」

しばらくして芭蕉と曾良、現れる。
おそるおそる、ということはないが、慎重に足を踏み入れるので、まだ天馬には気付かれていない。
天馬、また頭上のものを取ろうとしている。

芭蕉　「（あの人？）」
曾良　「（ですかね）」

天馬、取れないので一度諦めようとして二人に気づく。

天馬　「……あ」
芭蕉　「あ、すいません」

天馬　「はい」
芭蕉　「あの」
天馬　「なにか……？」
芭蕉　「あ、いや、あの、すいませんなんか、あの、船の……？」
天馬　「船の」
芭蕉　「はい」
天馬　「あ……はい」
芭蕉　「船長さん？」
天馬　「船長……っていうかそんな、船頭っていうか、まあ、はい」
芭蕉　「あ、そうですか。あの、ここって事務所で大丈夫ですか？」
天馬　「事務所？」
芭蕉　「はい」
天馬　「いや、事務所ってものは特になくて、倉庫ですよ、ただの」
芭蕉　「……あれ」
天馬　「なんですか？」
芭蕉　「いや……あの、なんか、外に書いてあったので、そう、倉庫ピーピー事務所って」
天馬　「外にですか？……あ、そうですね、はい」
芭蕉　「え？」
天馬　「あ、いや、事務所ですね」
芭蕉　「事務所なんですか？」
天馬　「いや、前は倉庫だったのを事務所に変えたのを忘れてました」
芭蕉　「そんなことあるんですか」
天馬　「すいません」
芭蕉　「いえいえ、こちらこそすいません」
天馬　「え、あの……どうかなさいましたか？」
芭蕉　「あ、そうそう」
天馬　「はい」
芭蕉　「あの僕たち、次に出る船に乗りたいと思って来てるんですけど」
天馬　「あ、はい」
芭蕉　「なんかその、時間とか大丈夫なのかな、っていうか」
天馬　「あー、はい」
芭蕉　「そろそろもう、ね、もう出る時間だと思うんでほんとは」
天馬　「あー」
芭蕉　「人とか集まってなくてまだ出ないのかなと思って」
天馬　「あーはい」
芭蕉　「そう。だから、なんかそう、アナウンスとか、ないってことは、遅れてるとしたらあの」
天馬　「あー、はい」
芭蕉　「案内みたいのあるのかなあと思って来たらなくて、」
天馬　「はいはい」

芭蕉　「で、なんか代わりに事務所とかあの、見つけちゃったので、なんか誰かいらっしゃるかなあとか思って」
天馬　「なるほど、すいません、そうですよね」
芭蕉　「あ、いえ、あのすいません勝手にこんな」
天馬　「あ、いえ」
曾良　「あの」
天馬　「え？」
曾良　「何か取ろうとしてらっしゃったんですか？」
天馬　「え？」
曾良　「いや、さっき。何か取ろうとしてらっしゃったのかと思って」
天馬　「ああ」
芭蕉　「あの、どうなんですかね、遅延みたいな感じなんですかね」
天馬　「え？」
曾良　「もしなにかあれば取りますよ」
天馬　「なにか？（会話が戻ったことに気づき）あ、大丈夫です」
芭蕉　「もし遅れてるなら時間、おおよそのとか教えていただければと思ったんですけど」
天馬　「あ、そうですね、あの今日なんですけど」
曾良　「取りますよ」
天馬　「え？」
曾良　「僕、背だけは高いんですよ」
芭蕉　「（どうしても無視できず）……だけはってことはないだろうよ曾良くん」
曾良　「そう思いますか？」
芭蕉　「そりゃあそうだよ曾良くんは。高いよ、色んなものが。ねえ？」
天馬　「え？」
曾良　「（天馬に）いやあそんな」
芭蕉　「いや、この方も、お世辞で言ってるんじゃないと思うよ。そうですよねえ？」
天馬　「……あ」
芭蕉　「ほら、見なさい」
曾良　「本当ですか。いやあ、嬉しいです」
天馬　「はい？」
芭蕉　「なんなら、他に何が高いか、聞いてごらんよ」
曾良　「いや、それはさすがに失礼じゃないですか」
芭蕉　「それはあれだよ、曾良くんの、お願いの仕方次第だと思うよ、僕は」
曾良　「本当ですか」
芭蕉　「ああ。さあ」
曾良　「え……あの……すいません。ご迷惑じゃなければ……？」
天馬　「……え……あの……え？」
曾良　「……？」

天馬　「え……座高（とか）？」

沈黙。

天馬　「あ……」
芭蕉　「曾良くん」
曾良　「はい」
芭蕉　「ほらね」
曾良　「ありがとうございます」
天馬　「いや、あの、はい。あの、なんていうか」
芭蕉　「ところで、ダイヤの話に戻してもいいですか？」
天馬　「え？……はい」
芭蕉　「なんか、その」
天馬　「はい」
芭蕉　「遅延とかですか？次の便って」
天馬　「あの、特別ダイヤなんですよ、今日」

間。

芭蕉　「あ、そうでしたか」
天馬　「はい」

芭蕉　「そういうことか」
曾良　「そういうことなんですね」
天馬　「はい」
芭蕉　「なるほど」
曾良　「なるほどですね」
天馬　「はい」
芭蕉　「合点がいったね」
曾良　「いってます」
天馬　「すいませんでした、わかりづらくて」
芭蕉　「いえ！（曾良に）何か祝日とかだっけか、今日は」
天馬　「あ、いや、そうじゃなく、」
芭蕉　「はい」
天馬　「あの、向こう岸で、祭りというか、イベントというか」
芭蕉　「イベント」
天馬　「いえ、それは違うんですけど」
曾良　「あの」

芭蕉、天馬、曾良の方を見る。

天馬　「はい」
曾良　「あの、すいません、結局のところ、何時ですか？次出るの、

すいません」

間。

天馬　「ああ。えーっと、そうですね、（時計見て）46分後……ですかね」

芭蕉　「あ、そんなに」

天馬　「はい。ちょっと、向こうに着く船が多いってことで今日は、ちょっと少なくなっちゃってて」

芭蕉　「あー」

芭蕉　「じゃあ、橋がある方まで歩いちゃったほうがいいのかな」

天馬　「あーでも、橋の方もたぶん通れる人制限とかしてるんですよね」

芭蕉　「あ、そうなんだ」

天馬　「ええ」

曾良　「そうですか、そしたら（芭蕉を向いて）ちょっと（時計を見てから）取ってきていいですか？家に」

間。

芭蕉　「……おみくじ？」

曾良　「はい」

芭蕉　「……わかった」

曾良　「すぐそばなんで、走ったら」

芭蕉　「そっか」

曾良　「行ってきます」

芭蕉　「はい」

曾良、去る。

沈黙。

芭蕉　「すいませんね……」

天馬　「あ、いえ……」

芭蕉　「子供みたいでしょ？」

天馬　「え、ああ」

芭蕉　「すぐどっかいっちゃうんですよ。今なんかは一声かけてくれたんで全然、いい方なんですけどね」

天馬　「あ、そうですか……」

芭蕉　「あ、お忙しいですか？」

天馬　「いや、まだ船は出ないんでそんな、忙しいってほどじゃないですけど」

芭蕉　「そうですか」

天馬　「……」

沈黙。

天馬　「あの」

芭蕉　「あ、そうだ」

天馬　「なんですか？」

芭蕉　「いや、さっき何かものを取ろうとしてらっしゃったなと思って」

天馬　「ああ」

芭蕉　「手伝いますよ」

天馬　「あ、いえいえ、大丈夫です」

芭蕉　「そんな、気にしないでください」

天馬　「いや、気にしてはませんけど」

芭蕉　「（上の方を見ながら）何を、取ろうとしてらしたんですか」

天馬　「いや……」

芭蕉　「？」

天馬　「あの、資料ですよ、普通に」

芭蕉　「資料。そうですか。どれですか？あの、赤いファイルのやつかな」

天馬　「いや、違ってあの、自分で取るので、ほんとに」

芭蕉　「そうですか……あ、でも……これですか？」

芭蕉、何かを取った。

天馬　「あ、いや……」

芭蕉　「あ、本か、これは。ただの」

天馬　「ですね、それは、ただの」

芭蕉　「草枕……漱石ですか」

天馬　「ああ、そうですかね、多分」

芭蕉　「そんなことない？」

天馬　「いや、そうでしょうね、そう書いてあるなら」

芭蕉　「あ、やっぱり」

天馬　「お好きですか？」

芭蕉　「漱石ですか。好きですよ。向こうも僕のこと好きだと思うし」

天馬　「向こう？」

芭蕉　「あ、いや」

天馬　「すみませんあの、有名な方ですか」

芭蕉　「あ、いやいや、そんなことはないんですけど、」

天馬　「あ、そうですか」

芭蕉　「というか、あの、一応、芭蕉っていうんですけど……松尾」

沈黙。

天馬　「ちょっと、すいません……」

芭蕉　「あ、そうですよね、すいません」

天馬　「いや、こちらこそ不勉強で」

芭蕉　「いえ」

天馬　「小説を書かれるんですか？」

芭蕉　「あ、一応あの、俳人、なんですけど」

天馬　「廃人？」

芭蕉　「あ、あの、俳句の……」

天馬　「あ、俳句ですか」

芭蕉　「ええ」

天馬　「そうですか」

芭蕉　「そうなんです」

天馬　「俳句ってことはあれですか、なんか、たらちねの～みたいな感じですか」

芭蕉　「あー、それはあれですね、短歌とかで使うやつですね」

天馬　「あ、そうなんだ」

芭蕉　「俳句は七七がないやつですね最後の」

天馬　「ああ、七七が」

芭蕉　「はい」

天馬　「いいですねえ、俳句」

芭蕉　「え、ほんとですか？」

天馬　「ええ」

芭蕉　「そうですか、嬉しいな」

天馬　「いえ」

芭蕉　「俳句なんて、やらないじゃないですか、古臭いし」

天馬　「そうですか？」

芭蕉　「思いませんか？」

天馬　「いやあ……まあ、思わないことはまあ、ないですけど、でも新しいと思いますよ、逆に」

芭蕉　「ああ、逆にね」

天馬　「いや、ほんとに」

芭蕉　「そうです？」

天馬　「いや、なんかいいですよ、五七五でなんか心の世界が開ける感じがして」

芭蕉　「そうなんですよ」

天馬　「うん。ん？」

芭蕉　「分かってらっしゃる方だ、あなたは」

天馬　「はあ」

芭蕉　「ひとつどうですか、詠んでみては」

天馬　「なんですか？」

芭蕉　「俳句ですよ」
天馬　「え、私ですか？」
芭蕉　「ええ」
天馬　「いや、無理ですよ、私は。お～いお茶の横に書いてあるみたいなのしか、見たことないです」
芭蕉　「十分ですよ、お～いお茶。たまに、（ポジティブに）お～い、ていうの、あるじゃないですか」
天馬　「まあ、ありますかね」
芭蕉　「ありますよ。そういうのイメージすればいいんですよ。まあ、逆に、（ネガティブに）お～いみたいのもありますけどね」
天馬　「ああ、ありますね英語のとかね」
芭蕉　「あ、いや、いいんですよ、英語のは英語ので。そんなこと言ってると、あの世でドナルド・キーンに叱られますよ」
天馬　「はあ」
芭蕉　「どうですか、一句」
天馬　「そうですね……」

間。

天馬　「大福を、三つ一気に、食べました（とか）」

間。

芭蕉　「はい」
天馬　「え、あ、ダメでしたよね、すいません」
芭蕉　「いえ……すごく、いいと思います」
天馬　「いや、やめてください、ほんと、すいません」
芭蕉　「初めてですか？詠むのは」
天馬　「はい、そうです」
芭蕉　「いいですねえ」
天馬　「そんなことないです」
芭蕉　「なんというか、初々しさみたいなものがあります。ないものですよ、僕には、もう」
天馬　「いや、そんな」
芭蕉　「いいなあ。やっぱり俳句は」
天馬　「ああ、よかったです、それなら」

間。

芭蕉　「あ、すみません、俳句のことになると」
天馬　「ああ、いえ……」
芭蕉　「すいません。ちょっと、探してきます」

天馬　「お弟子さん？はい、わかりました」
芭蕉　「すみません。（去っていこうとして）なんだこれ」

芭蕉、落ちている布を拾って立ち上がると、天馬がいた場所にはいつのまにかアトムがいる。
芭蕉、それとアトムを交互に見たのち、

芭蕉　「僕。僕」

アトム、芭蕉を見て、

アトム　「おじさん、僕って、僕のこと？」
芭蕉　「うん、君のことだよ」
アトム　「そっか。おじさん、僕に何か用？」
芭蕉　「そうだね。君も、船に乗りたいの？」
アトム　「船」
芭蕉　「ああ」
アトム　「ううん。僕、船に乗りたいんじゃないよ」
芭蕉　「そうなの」
アトム　「僕、船になんか乗らなくても、空を飛べるんだ」
芭蕉　「そうなのか。そりゃあすごいな」
アトム　「うん。僕はね、お母さんを探してるの」
芭蕉　「お母さん」
アトム　「おじさん、知らない？僕のお母さん」
芭蕉　「君のお母さんか、ごめん、ちょっと、知らないな」
アトム　「そっか、そうだよね」
芭蕉　「君、お母さんとはぐれちゃったんだね」
アトム　「うん。僕、お母さんとはぐれちゃった」
芭蕉　「そうか。じゃあ、向こうの事務所みたいなところまで連れて行ってやろうか。アナウンスを入れてもらおう。ほら、一緒においで」
アトム　「うん。おじさん、ありがとう。でも、大丈夫。お母さん、ここにはいないんだ、たぶん」
芭蕉　「そうなの？」
アトム　「うん。もっと、ずっと、ずっと遠いところで、はぐれちゃったんだ」
芭蕉　「そうなの？」
アトム　「うん。そんな気がするの」
芭蕉　「そこがどこなのか、覚えてはないのかい？」
アトム　「うん、覚えてないんだ」
芭蕉　「そうかあ」
アトム　「うん。僕、あんまり、実は、覚えてないんだ。いろんなこと

を。本当は、もっと、みんなよりも、たくさんのことを覚えられるんだって、お父さんには言われるんだけど」

芭蕉　「お父さん」

アトム　「うん」

芭蕉　「そうか。君は、お父さんと一緒に住んでるんだね」

アトム　「そうだね……一緒に住んでいるかは、わからないけど、お母さんよりは、お父さんといる時間の方が、長いよ」

芭蕉　「なんか、複雑なんだね」

アトム　「複雑？」

芭蕉　「ああ、ごめん。傷つけるつもりはないんだけど」

アトム　「ううん、傷ついてなんかないよ。でも、複雑なのかな。ちょっと、わからない」

芭蕉　「……そっか」

アトム　「ありがとう、おじさん。おじさんはいい人だ」

芭蕉　「いい人？そっか、そうでありたいね」

アトム　「うん、そうだよ」

芭蕉　「そっか、ありがとう」

アトム　「おじさん、ちょっと、僕についてきてくれる？面白いところに連れて行ってあげるよ」

芭蕉　「面白いところ？どこだい？それって」

アトム　「いいから、ついてきて」

芭蕉　「ついてくって、どこに？ねえ、ちょっと」

アトムと芭蕉、去っていく。

女、再び入場。

またしても舞台を一巡しようとするが、それがすまないうちに曾良がやってくる。

曾良　「（登場と同時に）芭蕉さーん」

女、一巡しようとするのをやめて普通に動くようになる。

曾良、女に気づいて、

曾良　「あ……」

女　「（軽くお辞儀）」

曾良　「すいません……」

女　「（軽くお辞儀）」

間。

曾良、女を向き直し、

曾良　「あ、さっきの……」

女　「（曾良の方を向いて）ああ……」

間。

曾良　「あの……」

女、曾良のほうを向く。

曾良　「あ、いや、すいません。なんかさっきは、すいません」

女　「……いえ」

曾良　「チケットありました？」

女　「いやなんか、次は満員だって」

曾良　「なんか、もしあれだったら、こっそりとか、乗っちゃえるんじゃないですか」

女　「……こっそりですか」

曾良　「はい、いやなんか、見たところっていうか、なんか、今からちょっと失礼なこと言いますけど、なんかお軽そうなんで、乗ってもなんか、重さの許容量みたいのとかその、設定されてる人数のその一人当たりの重さみたいのに換算して、なんか全然大丈夫なんじゃないかなっていうか」

女　「はあ」

曾良　「いや、なんか、こう見えても自分も軽いほうなんで、ああと、自分の一緒に乗る人、ってか、師匠なんですけど、あの人も軽みのある人なんで、だからみんなで、三人で考えても、多分想定の、結果的に二・五人分くらいには落ち着くんじゃないかなとか思ったりして」

女　「はあ」

曾良　「いや、なんというか、普段だったら、っていうか、俺一人だったら、全然代わってもらって、乗ってもらってって感じでやるんですけど、いかんせんちょっとその、さっきも言ったけど師匠とのなんか旅なんで、ちょっと断れねえっていうか、あ、いや、断れないのは、あなた、全く関係ないですけど」

女　「……？」

曾良　「あ、いやだから結局のところ、やっぱ一緒にこっそり乗っちゃいましょうよっていうか、なんか手伝いますよっていう、ことを言おうかなとか思って、なんか、すいません」

女　「いえ……」

曾良　「すいません」

女　「いえ……お気持ち嬉しいです」

曾良　「あ、すいません」

沈黙。

なんだか気まずくなったので去っていこうとする曾良に対し、

女　「なんの方なんですか？」

曾良　「（立ち止まり振り返って）なんのっていうのは？」

女　「いや、あの方。一緒にいる。というか、あなたもですけど、なんか、師匠さんっておっしゃってたので」

曾良　「……ああ、はい、あの、」

女　「はい」

曾良　「恥ずかしいんですけど、あの、」

女　「いえ」

曾良　「俳句なんですよ」

女　「俳句？」

曾良　「ええ」

女　「へえ！」

曾良　「なんか、すいません」

女　「え？なんでですか」

曾良　「いやなんか、地味ですいません」

女　「いやいやそんな」

曾良　「今回連れてかれるのもなんか、ご当地俳句の詠み倒れツアーみたいな感じなんですよ」

女　「詠み倒れですか？」

曾良　「そう。変でしょ？」

女　「いや、どうかな」

曾良　「まあ、とか言ってね、三〇〇年後とかには確実に、絶対、レジェンドになってると思ってるんですけど自分は」

女　「あなたが？」

曾良　「あ、いえいえ、師匠がですよ」

女　「ああ」

曾良　「自分はほんと、門下に入れただけでも大満足っていうか、そんな感じなんですけど」

女　「へえ」

曾良　「ああ、いや、すいません」

女　「いえ。尊敬してらっしゃるんですね、ずいぶん」

曾良　「そうですね、割と、そうかもしんないですね」

女　「今は、どちらに？」

曾良　「……自宅ですか？」

女　「？あ、いやいや、その、師匠の方は、」

曾良　「……？ああ」

女　「ご一緒じゃないのかなって」

曾良　「ですよね、」

女　「はい」

曾良　「いや自分も実は今めっちゃ探してて、さっき一瞬別れたんで

すけど、戻ってきたらいなくなってて」

女　「あ、なるほど」

アトムと芭蕉、現れて、

芭蕉　「僕、どこに向かってるの？」

アトム　「心配しないで、もう着いたよ」

芭蕉　「着いた？」

アトム　「うん」

芭蕉　「着いたって、ここ、さっきの事務所に戻ってきただけじゃないか」

アトム　「事務所？違うよ」

芭蕉　「ああ、外に書いてあっただろ、倉庫ピーピー事務所って」

アトム　「関係ないよ、そんなの」

芭蕉　「関係ないって、だめじゃないかおじさんをからかっちゃ」

アトム　「からかってないよ。僕、おじさんをここに連れて来たかったんだ。ここにいれば、必要な話が聞けると思う」

芭蕉　「必要な話？」

アトム　「うん。それじゃあね、またあとでね」

アトム、去っていく。

芭蕉　「いや、ちょっと！僕！ええ……」

切り替わり。

曾良　「そう、なんか、目離すとすぐどっかいっちゃうんですよ、」

女　「そうなんですか」

曾良　「はい。どこ行ったんだろ、ほんと」

女　「そんな俳句の、すごい方なのに」

曾良　「ね、その辺はなんかね」

女　「そうなんだ」

曾良　「子供みたいでしょ？」

女　「あ、そうですね」

切り替わり。

天馬入ってきて、

天馬　「え？」

芭蕉　「あ、すいません」

天馬　「いや、あれ？」

芭蕉　「なんですか？」

天馬　「いや、ついさっきまでいましたよ、あの、お弟子さん」

芭蕉　「ほんとですか？」
天馬　「はい。いや、追いかけたらいると思いますよもうほんと、すぐその辺に」
芭蕉　「ほんとですか」

芭蕉、外を覗く。

芭蕉　「いませんね」
天馬　「え、ほんとですか」
芭蕉　「ええ」
天馬　「え、ちゃんと探しました？」
芭蕉　「ええ」
天馬　「ほんとですか」
芭蕉　「はい」
天馬　「そうですか。じゃあ、ここで待ってたらいいんじゃないですか？」
芭蕉　「え？」
天馬　「いやなんか見つかんなかったらまた来るとか言ってたし、また入れ違っちゃったら嫌でしょう」
芭蕉　「ほんとですか？」
天馬　「はい。あ、嫌ならいいですけど」
芭蕉　「あ、いや全然。むしろすいません」
天馬　「いえ」
芭蕉　「すみません、またなにか、手伝いますか」
天馬　「いや……そうですね、じゃああの、荷物積むので手伝ってもらっていいですか」
芭蕉　「あ、はい、ありがとうございます」

二人、積み込みを始める。

曾良　「（急に）鳥、めっちゃいますね」
女　「（戸惑いつつ）ああ」

間。

芭蕉　「意外と重いですね」
天馬　「そうなんですよ」
芭蕉　「大変でしょう、女性だと」
天馬　「え、あ、私、男ですよ」

芭蕉、荷物を落とす。

芭蕉　「そうでしたか」
天馬　「あ、すみません、なんか」
芭蕉　「ああ、いやいや、こちらが」
天馬　「いえ」
芭蕉　「すみません、髪の毛が長くいらしたんでつい」
天馬　「髪ね、はい、よく言われます」
芭蕉　「伸ばしてるんですね」
天馬　「そう……妻がね」
芭蕉　「はい」
天馬　「長かったんで……」
芭蕉　「ああ」

間。

天馬　「なんとなくね」
芭蕉　「そうですか」
天馬　「ええ、まあ、お気になさらず」
芭蕉　「いやあ、すみません」
天馬　「いえ」

間。

作業を続ける二人。明らかに先ほどより荒々しく荷物を受け渡すようになった芭蕉。
天馬戸惑いつつ、

芭蕉　「ところで、なんですけど」
天馬　「はい」
芭蕉　「その、向こうでやってる、お祭り？さっきおっしゃってたのってなにやってるんですか？」
天馬　「え、ああ」

作業中断。

芭蕉　「なんか、フェス？」
天馬　「いや、フェスではないですね」
芭蕉　「ああ」

作業再開（何度か繰り返す）。

天馬　「いやあの、そうですね、なんかちょっと、説明しようとすると長いんですけど」
芭蕉　「長い？」

天馬　「ええ」
芭蕉　「祭りの説明が？」
天馬　「あ、いやあの、背景というか、」
芭蕉　「背景、ですか」
天馬　「はい」

間。

天馬　「なんというか、あんまり明るい話じゃないんです」
芭蕉　「お祭りなのに？」
天馬　「はい」
芭蕉　「アーティストがマリファナで捕まったんですか？」
天馬　「あ、だからあの、フェスじゃないんですよ」
芭蕉　「あ、舐達麻でしょ絶対！絶対そうだ！」
天馬　「違います」
芭蕉　「そうですか、じゃあ、なんですか？」
天馬　「なんというか、慰霊祭みたいなものなんですよ」
芭蕉　「慰霊」
天馬　「はい。まずはえっと……もうずいぶん、前のことになるんですけど」
芭蕉　「ええ」
天馬　「この川で、男の子が一人死んじゃったんですよ」
芭蕉　「死ん、ええ、この川で」
天馬　「はい」
芭蕉　「ええ、そうですか……」
天馬　「トビオくん、っていう子だったんですが」
芭蕉　「はい」
天馬　「あ、やめます？この話」
芭蕉　「ああ、いやいや。ここでやめないでください」
天馬　「そうですか」
芭蕉　「え、なんでですか？それって」
天馬　「死んだわけですか？」
芭蕉　「はい」
天馬　「なんか、氾濫した川に飲まれたんだそうです」
芭蕉　「氾濫か……まあ、そうか」
天馬　「ええ」
芭蕉　「それで？」
天馬　「でね、トビオくんにはお父さんがいて、天馬博士、という方なんですが、その人はあの、研究者で、ロボットの？研究をされていた方なんですけど、」
芭蕉　「ロボットですか？」
天馬　「ええ」

芭蕉　「はあ、すごいですね」
天馬　「いや」
芭蕉　「え？」
天馬　「ああ、いや」
芭蕉　「なんですか？」
天馬　「いやいや、でね」
芭蕉　「はい」
天馬　「その人……その、天馬博士はその一件以来すこしあの、おかしくなってしまったみたいで」
芭蕉　「いや、そりゃそうですよね」
天馬　「ええ。その、研究室に閉じこもっちゃったみたいなんです、自分の」
芭蕉　「なるほどねえ」
天馬　「ええ。で、まあそれはいいんですけど、しばらくして、それが去年の、まあ、実はちょうど今日のことなんですけど」
芭蕉　「今日。はい、どうしたんですか」
天馬　「ここで、またもう一人少年が亡くなったんです」
芭蕉　「ええ」
天馬　「やめますか？」
芭蕉　「いや、やめませんけど、え、なんかすごい、ちょっと怖いですねさすがに」
天馬　「そうですか？」
芭蕉　「いやだって、今からまさしくその川渡ろうとしてるのに」
天馬　「ああ、たしかにね」
芭蕉　「ちょっと、そうか。え、それも事故ですか？」
天馬　「いや、それがちょっとわからなくて」
芭蕉　「わからない」
天馬　「はい。その、だからさっき言ったトビオくん同様、氾濫した川にのまれたとか、すでに瀕死の状態で、発見されて、ちかくに運び込まれるのと同時だったとか、いろんな説があって」
芭蕉　「そうですか」
天馬　「そう。でね」
芭蕉　「はい」
天馬　「ただ、ここからはちょっとその、不思議な話なんですけど」
芭蕉　「不思議、はい」
天馬　「その、遺品のね、水筒だったかな、彼の」
芭蕉　「はい」
天馬　「なんかね、名前がね、トビオ、って書いてあったらしいんですよ」
芭蕉　「え？」
天馬　「はい」
芭蕉　「その二人目の」

天馬　「はい」
芭蕉　「ええ！」
天馬　「ね」
芭蕉　「なんですかそれ」
天馬　「不思議ですよね、ちょっと」
芭蕉　「いや、ちょっとっていうか、だいぶっていうか、え、怖い話じゃないですか」
天馬　「怖いですか？」
芭蕉　「いや、怖いですよ、ダメなんですよ僕」
天馬　「あ、じゃあ」
芭蕉　「続けて」
天馬　「……はい。で、その、二人目のトビオくんはね、その、要するに名前以外のことはほとんど何もわからなくて……あ、苗字はたしか。吉田だったかな？」
芭蕉　「はい」
天馬　「まあでもとにかくどこから来たのかとか、そういうのが全くわからなかったんです」
芭蕉　「なるほど」
天馬　「で、それをその、さっきの、天馬博士が、聞きつけたわけですよ」
芭蕉　「ああ、はい」
天馬　「それでね、天馬博士は思ったんです、『ああ、これはきっと、トビオを弔い直すチャンスなんだ』って」
芭蕉　「……というと？」
天馬　「天馬博士はね、息子のトビオくんが死んでからのうちに、奥さんもすぐに亡くなってしまって、ひたすら自分の研究を続けてたわけですよ、ロボットの」
芭蕉　「はい」
天馬　「それで、もしあの時、自分がもっと優秀だったら、なんとかしてトビオを救えたかもしれないって、思ってたんです。だから思ったんです。自分の手で「トビオ」を救い直せるとしたら今だって」

間。

天馬　「天馬博士は、二人のトビオのイメージをもとに、「アトム」というロボットを作ることに決めました」
芭蕉　「アトムですか」
天馬　「ええ。それで、それからは割に短かくて、アトムは、去年の四月七日に完成しました。それで、この川岸で今も毎日働いています。もうあんな事故が二度と起こらぬよう、この川の安全を守ってくれているんです」

沈黙。

芭蕉　「おわりですか？」

天馬　「おわりです」

芭蕉　「そうですか。あの……」

天馬　「はい」

芭蕉　「なんていえばいいんだろうな……」

天馬　「……はい」

芭蕉　「あの……祭りの話は、どこにいきましたか」

天馬　「……ああ」

間。

女と曾良のシーンに切り替わって、

曾良　「待つつもりなんですか？次の便」

女　「いや、まあそれしかないのかなって」

曾良　「でも、ずいぶん出ないらしいですよ」

女　「え、ほんとですか？」

曾良　「なんか、46分後とか」

女　「ほんとですか？」

曾良　「はい……日も暮れちゃうし……まあいいならいいと思うんですけど」

女　「参ったな」

曾良　「なんか、急いでらっしゃるんですよね？」

女　「私ですか？」

曾良　「はい」

女　「いや、急いでるっていうか」

曾良　「あ、そんなことない？」

女　「そんなことないこともないんですけど、そうですね」

間。

女　「ちょっと、人を探してるんです」

曾良　「人、あ、そうだったんですか」

女　「はい。でも、ちょっとどこにいるのかわからなくて」

曾良　「わからない」

女　「はい」

曾良　「はぐれちゃったってことですか？」

女　「はぐれちゃった。そうですね……」

曾良　「あ、なるほどね」

女　「はい」

曾良　「え、それ船乗っていいんですか？なんか、わかんないですけ

ど、向こうからすると見つけにくくなっちゃうんじゃないですか？」

女　「ああ」

曾良　「そんなことない？」

女　「いや、わかんないんですほんとに、どこにいるか。だから、きっとこっちにいるだろうなっていう方に、ずっと歩いてきたんです」

曾良　「……そうですか」

女　「はい」

間。

曾良　「あの」

女　「はい」

曾良　「乗っちゃいますか？こっそり」

女　「え？」

曾良　「船。手伝いますよ、僕」

女　「手伝う？」

曾良　「はい」

女　「なにをですか？」

曾良　「ちょっと、考えあるんですよ」

女　「考えですか？」

曾良　「ええ。手伝わせてください」

女　「いや」

間。

女　「はあ」

鳥の鳴き声がし、曾良と女、そちらを向く。

曾良　「なんだろうあの鳥……」

女　「？」

曾良　「ちょっと、確認してきます」

曾良、鳥を追いかけて去っていく。

女　「ああ」

天馬と芭蕉のシーンに切り替わり、

天馬　「祭りね、すっかり忘れてました」

芭蕉　「そうでしたか」
天馬　「すみません、まさかこんなに忘れるとは」
芭蕉　「いえ……忘れるのは誰にでも、ね」
天馬　「いや、お恥ずかしい」
芭蕉　「いえ」
天馬　「その、今日の祭りはね、その亡くなった少年のために墓標を立てたんです」
芭蕉　「ええ」
天馬　「それを囲んでね、まあ、念仏を唱えて、彼を弔おうってことで、去年からやってるんですよ」
芭蕉　「あ、なるほど」
天馬　「ええ、そしたらいつか、ここを通った人なりなんなりが、日本中に散るわけなんで、それでいつかその子の家族が見つかればって、いう感じみたいですけどね」
芭蕉　「なんなりっていうか、まあ、人でしょうけどね」
天馬　「はい」
芭蕉　「そうですか」
天馬　「はい」
芭蕉　「いやでも、お詳しいですねすごく」
天馬　「いや、船頭なんてやってたらそりゃあね」
芭蕉　「そうですか」
天馬　「ええ」
芭蕉　「いや、僕も実はこの辺なんですけど」
天馬　「あ、そうなんですか」
芭蕉　「そう、なんですけど、全然今のお話とか、知らなかったです」
天馬　「そうですか」
芭蕉　「まあ去年はちょっと、しばらく旅に出てたってのもあるんですけど」
天馬　「あ、なるほど」
芭蕉　「ええ」
天馬　「お好きなんですね旅が」
芭蕉　「好きですねえ」
天馬　「そうですか」
芭蕉　「ええ」
天馬　「これからもまた？」
芭蕉　「今からですか？ええ」
天馬　「へえ、いいですねえ」
芭蕉　「いや」
天馬　「どちらに？」
芭蕉　「東北の方まで行こうかなと思って」
天馬　「東北ですか、どこですか？」
芭蕉　「松島とか、行こうと思ってるんですけどね」

天馬　「松島、へえ、うらやましいな」
芭蕉　「いやあ。長いんですか、このお仕事は」
天馬　「私ですか？いや、実は去年からなんです」
芭蕉　「あ、そうなんですか」
天馬　「そう、前職に一区切りついたんでね」
芭蕉　「一区切りですか」
天馬　「ええ、それからまあ、妻に先立たれたのもあって」
芭蕉　「あ、そうですか」
天馬　「はい」
芭蕉　「それは、ご愁傷様で」
天馬　「ああ、すいません」

間。

芭蕉　「その、去年まではなにをされてたんですか？」
天馬　「なんですか？」
芭蕉　「だからその、前のご職業というのは」
天馬　「ああ」

間。

天馬　「そうですね……」
芭蕉　「はい」
天馬　「あの……」
芭蕉　「はい」
天馬　「研究ですね」
芭蕉　「研究？」
天馬　「はい」
芭蕉　「なんの？」
天馬　「ロボットの」
芭蕉　「え……？」

沈黙。

芭蕉　「……あ」
天馬　「はい」
芭蕉　「もしかして」
天馬　「はい」
芭蕉　「あの……」
天馬　「ええ」
芭蕉　「あなたって」
天馬　「はい」

芭蕉　「……派遣の方ですか？」
天馬　「はい？」

間。

天馬　「違いますよ」
芭蕉　「あ、そうですか」
天馬　「ええ」
芭蕉　「そしたらバイトですか？」
天馬　「バイト？」
芭蕉　「ええ」
天馬　「ああ……かもですね」

鳥の鳴き声がする。
二人、そちらを向いて、曾良と女のシーンに回帰。
鳥に連れられて曾良。

曾良　「鴎でした」
女　「ああ」

間。

曾良　「かっこいいなあ、鴎は」
女　「そうですかね？」
曾良　「え？」
女　「都鳥ですよ、きっと」
曾良　「都鳥？」

間。

女　「ええ」

間。

曾良　「そうですかね。鴎だと思うんだけどな」
女　「昔、男がね」
曾良　「はい」
女　「この渡り場で、歌を一首詠んだんです」
曾良　「歌？」
女　「名にし負はば　いざ言問はん　都鳥　わが思ふ人は　ありやなしやと」
曾良　「はあ。和歌ですか」
女　「そう。知りませんか？」

曾良　「すいません、自分俳句専門なんで。どういう意味ですか？」
女　「そうですね。旅の道中に、詠まれた歌なんですけどね、ここで目にした鳥の名前を都鳥って聞いて、都鳥、というくらいなら、私が都に残してきた恋い慕う方は無事なのか、どうか教えてください、っていう歌です」
曾良　「……はあ」
女　「わかりました？」
曾良　「あ、はい。深いっすねー！」
女　「恋の歌なんです」
曾良　「いやあ、深いっすよ」
女　「そう。私も今、その歌を詠んだ彼と同じ気持ちです」
曾良　「……恋ですか？」
女　「はい」
曾良　「へえ」
女　「恋はね、狂いですよ」
曾良　「狂い」

間。

天馬と芭蕉のシーンに切り替わり、

天馬　「来ないですね」
芭蕉　「来る気配もないですね」
天馬　「はい」
芭蕉　「なんかおみくじを取ってくるとかまたわけのわからないことを言ってたんですよ」
天馬　「おみくじですか」
芭蕉　「はい」
天馬　「それはたしかに、そうですね」
芭蕉　「ね……ちょっと、やっぱり探してきますね僕」
天馬　「あ、ほんとですか？」
芭蕉　「はい。いや、ありがとうございました、忙しい時に」
天馬　「あ、いえ……はい」
芭蕉　「すみませんでした……あ、これ、すみません、草枕」
天馬　「ああ、差し上げます」
芭蕉　「え？」
天馬　「もう読んだので」
芭蕉　「読んだ？」
天馬　「はい」
芭蕉　「何回？」
天馬　「一回」
芭蕉　「え、一回でいいんですか？」
天馬　「大丈夫です、一回で」

芭蕉　「そうですか」
天馬　「旅のお供にでもどうぞ」
芭蕉　「そうですか」
天馬　「ええ、ほんとに」
芭蕉　「そうですか……（と言いながらリュックにしまう）」
天馬　「じゃああの、すいませんでした」
芭蕉　「あ、いえいえ」
天馬　「じゃあ時間になったらご案内するので」
芭蕉　「あ、はい、こちらこそ、ごめんなさい」
天馬　「いえ」
芭蕉　「すいません、よろしくお願いします」

芭蕉、去り際に、先ほどの布を思い出し、

芭蕉　「あ、そうだ」
天馬　「なんですか？」
芭蕉　「なんかこんなの落ちてましたよ」
天馬　「え？」
芭蕉　「埃かぶってますけどちょっと」
天馬　「なんです？」
芭蕉　「はい。捨てますか？」

芭蕉、天馬にそれを渡す。

天馬　「なんだろう。ああ」
芭蕉　「すいません、ゴミでした？」
天馬　「あ、いや、懐かしいな」
芭蕉　「え？」

それは一枚の上着。
天馬、埃を払おうとして、

天馬　「こんなとこにあったんだ……（服についていたトゲか何かに）
あ、痛」
芭蕉　「大丈夫ですか？」
天馬　「ああ、すいません」

そしてそれを羽織る天馬。

天馬　「そうかあ」

そのまま去っていく。

芭蕉　「え？」

天馬、去っていき、芭蕉、取り残される。

曾良と女、入ってくる。

芭蕉と曾良「あ」

曾良　「いた」

芭蕉　「曾良くん」

曾良　「いや、どこいたんですか、探しましたよ」

芭蕉　「え？ああ、ごめんごめん」

曾良　「大丈夫っすけど」

芭蕉　「持ってこれた？おみくじ」

曾良　「持ってきましたよほら」

芭蕉　「そっか、よかった……小吉なんだ……」

曾良　「？はい」

芭蕉　「そっか……（女に）というか、さっきの……？」

女　「あ、はい」

芭蕉　「ああ。なんか、お話してたの？」

曾良　「ああ、そうですね。なんか困ってたみたいだったじゃないですかさっき」

芭蕉　「ああ、」

曾良　「だから、はい」

芭蕉　「そっか」

芭蕉と女会釈。

芭蕉　「チケット……？」

女　「あ……」

曾良　「あ、はい」

芭蕉　「買えたの？」

女　「いや、なんか」

曾良　「次の便は、やっぱり満員みたいで」

芭蕉　「あ、そうなんだ」

女　「（頷く）」

曾良　「でもなんかどうですか？」

芭蕉　「なにが？」

曾良　「乗れると思いません？普通に」

芭蕉　「どういうこと？」

曾良　「だから、あれですよ、こっそり」

芭蕉　「こっそり？」

女　「あ、あの、それはもう」

芭蕉　「いやあ、こっそりはだめだろう曾良くんさすがに」

曾良　「いけますよ。そんな、一人増えて転覆するわけでもあるまいし」
芭蕉　「転覆って、それはまあ、しないだろうけど」
曾良　「だからちょっと手伝おうっていう気持ちであれなんですよ」
女　「いや、だからその」
芭蕉　「手伝うっていったってねえ？（女頷く）なにをどうするの」
曾良　「とりあえずあの、さっきのあの船長さんにお願いしてみようって思うんですけど」
芭蕉　「え？」
曾良　「なんですか？」
芭蕉　「いや」
曾良　「ね？」
芭蕉　「いやあ、うーん、どうかなあ」
曾良　「するだけしてみればいいじゃないですか」
女　「ほんと、すみません、大丈夫ですほんとに」
芭蕉　「はあ」
曾良　「いや、聞いてみるだけみましょうよ」
芭蕉　「うん……いいけど、だめだったらどうするの？それで」
曾良　「そしたら、いよいよ、こっそり」
芭蕉　「いや、それなら初めからこっそりの方がいいよ」
曾良　「え！」
芭蕉　「だってそうしないと犯行予告みたいなことになるよ結局」
曾良　「いや、芭蕉さん、悪いなあ」
芭蕉　「いや、いずれにせよやるならっていうことだよ？」
曾良　「そうか」
芭蕉　「うん」
曾良　「それもそうですね」
芭蕉　「そうだろう」
女　「あの」
曾良　「いや、さっきちょっと話したんですけど、優しそうな人だったんで、最悪バレても怒られませんよ」
女　「話したって？」
曾良　「あのー」
芭蕉　「船長の人ですよ」
女　「え、そうなんですか」
曾良　「はい」
女　「バレても大丈夫そうだったんですか？」
曾良　「多分……ねえ？」
芭蕉　「うん……どうだろうな、たしかにほんと、怒るっていう感じの人ではなかったけどね」
女　「そうですか」
曾良　「はい」

女　「じゃあやっぱり頼んできた方が」
芭蕉　「え？」
女　「いや、それならやっぱり頼んでみた方がいいかなって」
曾良　「いや、それはあの、師匠がダメって言ってるんで」
女　「そっか」
芭蕉　「いや、ダメとは言ってないよ僕は」
曾良　「言ったじゃないですか」
芭蕉　「だから、断られてもどうせやるならそっちの方がいいって言っただけで」
曾良　「言ってるじゃないですか」
芭蕉　「だから違うよ」
曾良　「何がですか？」
芭蕉　「だから」

そこにアトムが現れる。

女　「あ」

アトム、三人のいる方を向いて、

アトム　「お母さん」
芭蕉　「あ」
女　「僕」
芭蕉　「さっきの」
アトム　「おしまい？もう、おしまい？」
女　「おしまい？」

女、芭蕉、曾良、顔を見合わせる。

芭蕉　「おしまいじゃ、ないよ」
アトム　「そっか」
芭蕉　「僕、お母さんは見つかった？」
アトム　「おじさん、誰？」
芭蕉　「あれ……さっき、話しただろう、あっちで」
アトム　「そうだっけ？」
芭蕉　「忘れちゃったか」
アトム　「うん……ごめん、おじさん」
芭蕉　「いや、いいんだ……（女に）あなたも、彼と？」
女　「あ、はい、さっき、ちらっと」
芭蕉　「そうですか」
女　「はい」
芭蕉　「僕、あの人のことは覚えてるかな？」

アトム　「うん、覚えてるよ。お母さんだ」

芭蕉、女の方を見る。

女、違う、というように小さく首を振る。

芭蕉　「君の？」

アトム　「ううん、僕のじゃない」

芭蕉　「……そうか」

曾良　「あの、」

芭蕉　「ん？」

曾良　「この子は？」

芭蕉　「ああ、曾良くんはそうだよね」

曾良　「ええ」

芭蕉　「なんか、お母さんを探してるみたいなんだよ」

曾良　「迷子ですか」

芭蕉　「まあ、そういうことだね」

曾良　「そうなんだ。じゃあ僕、連れてってきますよさっきの事務所」

芭蕉　「あ、」

曾良　「僕、」

アトム　「誰？」

間。

曾良　「弟子」

間。

アトム　「弟子？」

曾良　「うん。この人のね」

アトム　「弟子。そうなんだ」

曾良　「ああ」

アトム　「お母さんも弟子なの？」

女　「え？」

アトム　「おじさんの」

女　「ああ、ううん。私は弟子じゃないよ」

アトム　「そうなんだ」

女　「うん」

アトム　「あ」

女　「え？」

アトム　「おじさん、そういえば船に乗りたいんだったよね」

芭蕉　「え？ああ、そうそう！思い出してくれたんだ」

アトム　「うん、思い出した。忘れちゃっててごめんね」

芭蕉　「いやあ、いいよいいよ」
アトム　「弟子も船に乗りたいの？」
曾良　「え。あ、うん、そうだね。弟子も船に乗りたい」
アトム　「そっか。お母さんも？」
女　「ああ、うん、そうだよ」
アトム　「そっか、そうだったんだ」
女　「でも、私はちょっと乗れるかわかんないんだ」
アトム　「そうなの？」
女　「うん」
アトム　「どうして？」
女　「満員なんだって、船が。だから、乗れるかわかんないの」
アトム　「満員」
女　「うん」
アトム　「そっか、わかった」
女　「え？」
アトム　「僕の代わりに乗ればいいよ」
芭蕉　「……どういうこと？」
アトム　「いつも、お父さんと一緒に船を漕いでるんだ、僕」
女　「お父さん」
アトム　「うん。だから今日くらいは譲ってあげる、あなたに」

間。

芭蕉　「あれ？」
アトム　「おじさん、どうしたの？」
芭蕉　「いや、君、もしかして、アトムくん？」
アトム　「うん、そうだよ」
芭蕉　「ああ、そういうことか」
曾良　「どういうことですか？」
アトム　「おじさん、僕のこと知ってるの？」
芭蕉　「ああ、いやいや、ついさっき船の船長さんに聞いたんだよ。そうか、君がアトムか」
アトム　「うん。そうだよ。おじさんは？」
芭蕉　「おじさん？おじさんはね、芭蕉っていうんだ。松尾芭蕉」
アトム　「バショウ」
芭蕉　「ああ」
アトム　「僕より変な名前だね」
芭蕉　「ええ、そうか？」
アトム　「うん、そうだよ。おじさんそれ、ほんとの名前なの？」
芭蕉　「いや、俳人としての名前なんだ。しかも三つめの」
アトム　「そうなんだ。それなら、僕も二つめの名前だよ」
女　「え？」

天馬が現れる。

天馬　「お待たせしてすいません。次の便にご乗船の方どうぞ」

芭蕉　「あ」

アトム、ここで一度去る（舞台奥の壁の方に寄る）。

芭蕉と曾良、女のことを気にしている。

天馬　「あ」

芭蕉　「ああ」

天馬　「どうも」

芭蕉　「どうも」

天馬　「（会釈）」

曾良　「（会釈）」

天馬　「あ、どうぞ」

芭蕉　「ああ」

天馬　「すいません、ほんとにお待たせしてしまって」

芭蕉　「ああ、いえ」

天馬　「すいませんでした……」

芭蕉　「いえ……」

天馬　「どうぞ（女を確認して）あ、お二人……ですよね？」

芭蕉　「え、ああ、ええ」

天馬　「すいませんそちらの方は……」

芭蕉　「えっと、そうですね」

曾良　「あの」

女　「あの、すみません、乗せてもらえませんか、急いでるんです」

曾良　「（そうです）」

間。

天馬　「はい、えっと、チケットとかって」

女　「ないんです」

曾良　「（そうなんです）」

天馬　「ああ、なるほど」

芭蕉　「はい、なんか満員ってのはわかってはいるんですけど」

天馬　「お知り合いですか？」

芭蕉　「なんですか？」

天馬　「いや、だから」

芭蕉　「私たちですか？私たちは……」

曾良　「知り合いとかでは」

女　「ないですね」

天馬　「そうですか」
女　「ダメですか？」
天馬　「ダメ……そうですね……やっぱり、定員はね」
女　「定員」
芭蕉　「なんか、ほんと知り合いとかでもなくあれなんですけど、すごい、急がれてるみたいなんですよ」
天馬　「ああ。それは、はい、わかるんですが」
曾良　「それがわかるのも、わかるんですが」
天馬　「それも、わかるんですが」
曾良　「も、わかるんですが」
天馬　「わかるんですが」
曾良　「も、！」
天馬　「はい」
曾良　「軽いんですよ」
天馬　「軽い？」
曾良　「ええ、この人」
天馬　「……この方？」
曾良　「ええ」
天馬　「そうですか」
曾良　「はい」
天馬　「そうですか……」

曾良　「はい」

沈黙。

アトム、去りながら、天馬にだけ届くように、

アトム　「お父さん」
天馬　「ん？」
アトム　「乗せてあげてください」
天馬　「……」
アトム　「僕、大丈夫ですよ」
天馬　「……」
アトム　「だから、僕の分であの人を乗せてあげてください」
天馬　「……」
アトム　「僕たちは、隅田川の渡し守なんだから」
天馬　「いいの？だって今日は」
アトム　「うん。だって僕、空を飛べるもの」
天馬　「そうか」
アトム　「はい。それに僕はもう、トビオじゃないから」

間。

天馬　「そうか」

アトム去って、

天馬　「じゃああの、どうぞ」
曾良　「お」
女　「ほんとですか？」
天馬　「ええ」
曾良　「よかったですね」
女　「あ、はい」
芭蕉　「いやあ、幸先がいいね」
曾良　「ね」
芭蕉　「なんか、あれだね」
曾良　「なんですか？」
芭蕉　「いいことすると気持ちがいいなー！」
曾良　「何もしてないですけどね」
芭蕉　「まあね」
女　「いや、ほんと、ありがとうございました、助かりました」
芭蕉と曾良「いやあ」
女　「いや、ほんと、ありがとうございます」
曾良　「いえ、よかったです、ほんと」

一同、船に乗る。
芭蕉と曾良、船の真ん中あたりまで行く。

天馬　「（女に）あ、じゃあちょっと、申し訳ないんですが、そこの端の、盛り上がってるとこでもいいですか？元の方優先で」
女　「ここですか？」
天馬　「はい」
芭蕉　「あ、全然」
曾良　「気にしないでください」
女　「あ、いえ。大丈夫です」
芭蕉　「……」

ということで芭蕉・曾良とは離れて座る。
天馬だけがなにか動作をしていて、
沈黙。

天馬　「それじゃすいません。大変お待たせしましたが、いきますねー」

天馬、船を漕いでいる。
沈黙。

曾良　「なんか、よかったですね」
芭蕉　「いやあ、ほんとそうだねえ」

間。

曾良　「てかどこいたんですか？ずっと」
芭蕉　「え、いや、こっちのセリフだよ。すぐいなくなっちゃんだもん曾良くんは」
曾良　「いやこっちですよ」
芭蕉　「え？」
曾良　「僕は取ってくるって言ったじゃないですかおみくじ」
芭蕉　「まあね」
曾良　「で、戻ってきたらいなかったんじゃないですか芭蕉さんが」
芭蕉　「ええ、そう？」
曾良　「そうですよ。うろちょろするから」
芭蕉　「うろちょろって、ごめんよ」
曾良　「はい」
芭蕉　「でもなんか、あの女の人と仲良くなってたみたいだったじゃない」
曾良　「あーそれはそうですね」
芭蕉　「でしょう？」
曾良　「はい。なんか聞かれたんで色々芭蕉さんの話もしときましたよ」
芭蕉　「あ、ほんとに？」
曾良　「ええ」
芭蕉　「なんか、ご当地俳句詠み倒れとか言ってないだろうね？」
曾良　「いや、えっと、はい」
芭蕉　「言ったね」
曾良　「はい」
芭蕉　「いや、あのさ、言っとくけど、僕が言ってるのはさ、この旅はさ、ご当地グルメの食い倒れみたいなことじゃないんだよ」
曾良　「あ、違うんすか」
芭蕉　「なんかさ、いろんな有名な和歌とかの題材になったみたいな名所？とかを旅してさ、そこでまたそれぞれ、感じ入ることを俳句にしたいんだよ、それがマイスタイルだから」
曾良　「はあ」
芭蕉　「だから、全然そういうB級グルメみたいなことじゃないんだからね」
曾良　「あ、そうすか」
芭蕉　「そうだよ、ほんとにもう」
曾良　「あでも、さっきあの女の人に聞きましたけど、ここもじゃあなんか舞台の有名な和歌があるらしいですね」

芭蕉　「有名？」

曾良　「はい、知らないっすか？なんかなんだっけな……都鳥がなんとかみたいな」

芭蕉　「都鳥？」

曾良　「はい。なんだっけ、塩がなんとかでいざなんとかみたいな」

芭蕉　「塩？」

曾良　「はい、あ、やっぱ知らないっすか。じゃあやっぱそんな有名な歌じゃないんだ」

芭蕉　「……知ってるよ？」

曾良　「え、まじすか」

芭蕉　「うん。知ってるよ。都鳥で塩のやつでしょ？当たり前じゃない。」

曾良　「あ、ほんとすか」

芭蕉　「当たり前だよ。あーそっか、ここそっかー忘れてたわ、そうだ」

曾良　「あ、そうなんすか」

芭蕉　「うんそうだよ、あーすごいど忘れしてた、ははは」

曾良　「あーそうなんだ」

芭蕉　「ははははは！」

曾良　「え、じゃあなんか早速一句とかいけるんですか？」

芭蕉　「え？」

曾良　「え？いや……なんか、それがマイスタイルだって今言ってたから」

芭蕉　「ああ、うん、そうだね、詠んじゃおうかなじゃあ早速」

曾良　「お、まじすか」

芭蕉　「あ、うん。塩、都鳥……」

芭蕉考えている。

芭蕉　「（曾良を見る）」

曾良　「（わくわくして待っている）」

芭蕉　「（諦めて考える）」

間。

しばらくして、

芭蕉　「……塩にしても　いざことづてん　都鳥」

間。

曾良　「……どういう意味っすか？」

芭蕉　「いや……だから、その……都鳥を？……だからその……塩漬

けにして、その……都に送ってあげよう！っていう……」

間。

曾良　「おー」
芭蕉　「だめかな」
曾良　「いや、はい、そんな感じでした、たしか、はい」
芭蕉　「あ、ほんと」
曾良　「はい。いやーさすがだなー」
芭蕉　「あ、ほんと。よかった」
曾良　「さすがだわあ」
芭蕉　「あ、よかった」
曾良　「はい。え、芭蕉さんはなんかなにしてたんすか？」
芭蕉　「え、いやそうだね、あの船長さんといろいろ話してたよ」
曾良　「あ、ほんとですか」
芭蕉　「うん。なんか早速、旅の醍醐味って感じ」
曾良　「あ、そうすか」
芭蕉　「うん」
曾良　「何話したんすか」
芭蕉　「いや、なんだろう。なんか、俳句の話とか」
曾良　「俳句ですか」
芭蕉　「うん」
曾良　「それ絶対芭蕉さんが語っただけですよね」
芭蕉　「まあ、そうかもね」
曾良　「やっぱりね」
芭蕉　「そうだね……あ、でもなんか面白い話聞いたよ」
曾良　「なんですか？」
芭蕉　「面白いっていうか、怖い話？」
曾良　「はい、なんですか」
芭蕉　「いやなんかね、ちょっと話すと長いんだけどさ」
曾良　「ええ」
芭蕉　「まあダイジェスト版にして話すことにするけど、なんかあの、祭りをやってるって言ってたじゃない」
曾良　「あ、はい、今日ね」
芭蕉　「そう、そこまではいたよね」
曾良　「ええ」
芭蕉　「そう、それで混み合うから便少なくなっちゃったっていう」
曾良　「はいはい」
芭蕉　「でさ、こっからがその人の話の本題だけど、なんかあれなんだって、」
曾良　「なんですか？」
芭蕉　「なんか、去年、この辺でなんか……死んじゃった？男の子の、

がいて、それのなんか弔いみたいなことらしいんだよ」
曾良　「え去年ですか」
芭蕉　「そう。言ってた、たしか」
曾良　「えー、めっちゃ、そっかあ」
芭蕉　「なに？」
曾良　「いや、なんか、知らなかったなあと思って」
芭蕉　「ね、」
曾良　「へー」
芭蕉　「うん、僕も知らなくて」
曾良　「ですよね」
芭蕉　「うん、そう、それでね」
曾良　「はい」
芭蕉　「トビオ君って、昔この川で死んじゃった子がいたらしいんだけど、なんかその去年死んじゃった子もどうやらトビオ君って名前だったらしくてさ」
曾良　「同じ名前ですか」
芭蕉　「うん、怖くない？」
曾良　「そうですね、そんな珍しい名前で」
芭蕉　「そうそう」
曾良　「田中とか鈴木ならまだね、わかりますけど」
芭蕉　「あ、うん、それだと苗字だからまた話が違うんだけどさ」
曾良　「あ、名前っすか」
芭蕉　「うん、名前名前」
曾良　「あなんだ、苗字かと思った」
芭蕉　「あ、ごめんそう。そう、だからなんかね、怖いなって。そうでもなかった？」
曾良　「いや、そんなことないですけどね」
芭蕉　「あ、ほんとに」

女、それまで黙っていたが、そのままの姿勢でふと、

女　「あの」

芭蕉と曾良、女の方を向いて、

芭蕉　「あ、はい」

女、二人の方を見ることなく、

女　「今の話って、いつの話ですか、それって」
芭蕉　「去年の三月の、というか今日って、聞きましたけど」
女　「その子の歳って」

芭蕉　「え、えっと、どうかな」

天馬、一同を見て、

天馬　「すいませんみなさん、もうすぐ着きます。あの、ぼちぼち降りる準備とかしといてもらえたらって、あの、どうかしました？」

芭蕉　「あ、あの」

天馬　「はい」

芭蕉　「いやあの、さっきお話しいただいた話あったじゃないですか」

天馬　「え？ああ、はい」

芭蕉　「なんかあの（女を指して）聞きたいことあるみたいなんですけど」

天馬　「はい」

芭蕉　「なんかその、亡くなった子って、いくつぐらいだったんですかね、わかってないのかな」

天馬、女の方を見て、

天馬　「十二……だったかな」

芭蕉　「あ、そうですか」

女　「名前って」

天馬　「トビオくんですね」

女　「苗字って」

天馬　「……吉田だったかな、たしか」

女　「それで、その後母親もなにも尋ねてこないって」

天馬　「そうですね」

間。

芭蕉　「あ、どうも、ありがとうございます」

天馬　「いや」

女　「あの」

間。

天馬　「はい」

女　「親類も親も誰も尋ねてこないんですよね、」

芭蕉　「ああなんか、そうみたいですね」

天馬　「ええ。それで……」

女　「いやあの、それ、当然ですよ。そりゃそうですよ、だってそれ、私の息子です」

女、能のシオリのようなポーズで静止している。
沈黙。

曾良　「え？」

間。

芭蕉　「どういうことですか？」

沈黙。

天馬　「えっと……」

間。

天馬　「着きました」

間。
女、静止している。

天馬　「あの……降りてもらって、大丈夫なんで」

芭蕉と曾良、お辞儀。
天馬、降りていき、しばらくして、芭蕉と曾良も去っていく。
いつの間にか現れていたのはアトム。

女　「また会ったね、僕」
アトム　「お母さん？」

女、すこしだけためらって、

女　「ううん、わたし、あなたのお母さんじゃないよ」
アトム　「そっか、そうだよね」
女　「お母さん、探してるの？」
アトム　「うん」

間。

女　「いいなあ」
アトム　「え？」
女　「羨ましいなあ」
アトム　「どういうこと？」

女、アトムのほうを向いて、
間。

女　「僕、なんていうの？」
アトム　「名前？」
女　「うん」
アトム　「僕、アトムだよ」
女　「アトム？」
アトム　「うん」
女　「アトム」
アトム　「うん」
女　「変な名前だね」
アトム　「そんなことないよ」

沈黙。

女　「トビオ」

沈黙。
曾良と天馬が現れていて（アトムのことは見えていない）、

天馬　「すみませんでした、なんだか」
曾良　「あ、いえいえ」
天馬　「師匠の人にも謝っといてください」
曾良　「いやあ、全然あなたが悪いとかじゃないですよ、というか、誰も悪くないです」
天馬　「いやでも、せっかくの旅の最初なのに、こんななんか」
曾良　「いやあ」
天馬　「ほんと、すみません」
曾良　「いえ。なんか、呑気なみたいですけど、不思議ですね、人生は……」
天馬　「いえ。ほんとに、そうですね」
曾良　「ね……ところで、なんですけど」
天馬　「はい」
曾良　「自販機ってありますか？このへんに」
天馬　「呑気ですね」
曾良　「え？」
天馬　「そこに井戸が」
曾良　「井戸」
天馬　「はい」
曾良　「そりゃそうか」
天馬　「ええ」

曾良　「じゃあ、ちょっと……」

曾良、井戸の水を汲み始める。

天馬　「苔とか大丈夫ですか？」

曾良　「え、大丈夫そうですけど、え、普段使ってるやつじゃないんですか？」

天馬　「いや、大丈夫だと思いますけど、私最近使ってないんで……」

と言いながら天馬、井戸の底をのぞく。

曾良　「ええ、まじっすか……」

曾良、水質を確かめている。

天馬　「ああ……」

曾良　「なんですか？」

天馬　「いや、懐かしいなって」

曾良　「え、懐かしいって、そんなに使ってないんですかまじですか」

天馬　「いや、そうじゃなくて」

天馬、羽織った上着を触り、アトムのシーンに切り替わる。

アトム　「お母さん？」

天馬の妻、振り向く。

アトムの方を見つめて、

天馬の妻「……」

アトム　「お母さん」

間。

天馬の妻「アトム」

間。

アトム　「うん」

天馬の妻「ごめんね」

アトム　「ううん。どうして？僕……」

間。

アトム　「懐かしいよ」

沈黙。

不意にアトム、天馬の妻の方に一歩だけ歩み寄ったところで、

曾良　「いや、美味いっすよ、すげえ。全然現役じゃないですかこの透明度」

いつしか汲んだ水をゴクゴクと飲んでいた曾良。

天馬　「あ、ほんとですか、よかったです」

アトムは既に去っている。

天馬、再び井戸の底をちらりと覗く。

曾良　「じゃあ、すいません。ありがとうございました、なんかいろいろ」

天馬　「え、ああ、いえ、こちらこそ」

曾良　「また、どっかで。てか、戻ってきますけど。何ヶ月かしたら」

天馬　「ああ、ええ。よい旅を」

曾良、去っていき、いつの間にかそこにいたのは女。

女　「あの」

天馬　「あ、はい」

女　「なんか、トビオがいるところってありますか」

天馬　「え？ああ、お墓（と言いかけてやめる）」

女　「……」

天馬　「こっちです」

女　「はい」

歩きながら（数歩の移動）、

天馬　「いろんな人がこう」

女　「そうですね」

天馬　「ええ……」

沈黙。

天馬　「こちらですね」

女　「……」

沈黙。

天馬　「（手を合わせ、小声で）南無阿弥陀仏……」

女　「……」

天馬、女の後方に立っていたが、しばらくして去っていく。

沈黙。

女、墓に向かってゆっくりと手を合わせる。

沈黙。

そして芭蕉が入ってき、女のことを見つめている。

長い沈黙。

曾良　「芭蕉さん」

芭蕉、長い夢から覚めて、

芭蕉　「ああ、曾良くん」

曾良　「はい」

芭蕉　「ごめん、寝てたよ」

曾良　「知ってます、はい」

芭蕉　「そうだよね」

曾良　「はい」

芭蕉　「待っててくれたんだもんね」

曾良　「そうですね」

芭蕉　「いま、何時？」

曾良　「〇〇（上演の現在時刻）ですよ」

芭蕉　「そっか」

曾良　「出ちゃいましたよ、船、もう」

芭蕉　「そうだよね……起こしてくれればよかったのに」

曾良　「すいません」

芭蕉　「いや、ううん、僕が悪いんだよ」

曾良　「……まあ、そうですね」

芭蕉　「ね……まあ、まったりいこうよ」

芭蕉、煙草に火をつけている。

つられて曾良も。

二人静かに煙を吐く。

芭蕉　「あ」

曾良　「なんすか？」

芭蕉　「一句、思いついたよ」

曾良　「お、まじすか」

芭蕉　「うん。言っていい？」
曾良　「はい。もちろん」
芭蕉　「行く春や」
曾良　「……なんですか？」
芭蕉　「どうしようかな」
曾良　「はい」

間。

芭蕉　「行く春や　鳥啼き　魚の目は涙」
曾良　「……おお」
芭蕉　「どうかな」
曾良　「いいっすね」
芭蕉　「ほんと？」
曾良　「はい、いいっす」
芭蕉　「そっか、ありがとう」

間。

芭蕉　「もう三月なんだねえ」
曾良　「ええ」

芭蕉と曾良、まだ煙草を燻らせている。
女はその手前側に、下手後方を向いて立ち尽くしている。
芭蕉と曾良は、煙草を吸い終えて、

芭蕉　「そろそろ行こうか」
曾良　「そうですね」

二人、去っていく。
女、なにかの気配に気づき、それをそっと抱きしめる。
しかしもう何もない。
女、取り残されて、幕。

《執筆にあたり、主に参考にした文献を記載します。　筆者》

◆池澤夏樹編『日本文学全集 12』河出書房新社　2016 年
◆伊藤正義『新潮日本古典集成　謡曲集 中』新潮社版　1986 年
◆大塚英志『アトムの命題　手塚治虫と戦後まんがの主題』徳間書店 2003 年
◆大塚英志『まんがはいかにして映画になろうとしたか　映画的手法の研究』NTT 出版　2012 年
◆大塚英志『「おたく」の精神史　一九八〇年代論』星海社新書　2016 年
◆大塚英志『手塚治虫と戦時下メディア理論　文化工作・記録映画・機械芸術』星海社新書　2018 年
◆岡田利規『三月の5日間』白水社　2005 年
◆ドナルド・キーン　吉田健一訳『能・文楽・歌舞伎』講談社学術文庫　2001 年
◆ドナルド・キーン　金関寿夫訳『百代の過客　日記にみる日本人』講談社学術文庫　2011 年
◆ドナルド・キーン　徳岡孝夫訳『日本文学史―近世篇〈一〉』中公文庫　2011 年
◆宮藤官九郎『鈍獣』PARCO 出版　2005 年
◆小山弘志、佐藤喜久雄、佐藤健一郎『日本古典文学全集　謡曲集一』小学館　1973 年
◆小山弘志『岩波講座　能狂言　VI能鑑賞案内』岩波書店　1989 年
◆新創社編『東京時代 MAP　大江戸編』光村推古書院　2005 年
◆杉本苑子『能の女たち』文春新書　2000 年
◆世阿弥　竹本幹夫訳注『風姿花伝・三道　現代語訳付き』角川文庫 2009 年
◆手塚治虫『鉄腕アトム①』講談社　2002 年
◆手塚治虫『アトム今昔物語』講談社　2010 年
◆手塚治虫『鉄腕アトム別巻』講談社　2010 年
◆萩原恭男『芭蕉　おくのほそ道　付　曾良旅日記　奥細道菅菰抄』岩波文庫　1979 年
◆萩原恭男『図説　地図とあらすじでわかる！　おくのほそ道』青春新書　2013 年
◆長谷川櫂『俳句の宇宙』花神社　1989 年久富哲雄『奥の細道の旅ハンドブック改訂版』三省堂　2002 年
◆長谷川櫂『「奥の細道」をよむ』ちくま新書　2007 年
◆長谷川櫂『決定版　一億人の俳句入門』講談社現代新書　2009 年
◆長谷川櫂『古池に蛙は飛びこんだか』中公文庫　2013 年
◆久富哲雄『奥の細道の旅ハンドブック改訂版』三省堂　2002 年
◆松尾芭蕉『ビギナーズ・クラシックス　日本の古典　おくのほそ道（全）』角川書店　2001 年
◆松尾芭蕉　ドナルド・キーン訳『英文収録　おくのほそ道』講談社学術文庫　2007 年
◆矢口高雄『マンガ日本の古典 25　奥の細道』中公文庫　2001 年
◆安田登『あわいの力　「心の時代」の次を生きる』ミシマ社　2014 年
◆安田登『能　650 年続いた仕掛けとは』新潮新書　2017 年
◆安田登『異界を旅する能　ワキという存在』ちくま文庫　2011 年
◆安田登『本当はこんなに面白い「おくのほそ道」　おくの細道は RPG だった！』実業之日本社　2014 年
◆安田登『身体感覚で「芭蕉」を読みなおす。『おくのほそ道』謎解きの旅』春秋社　2012 年
◆横道萬里雄、表章『日本古典文學大系 40　謡曲集上』岩波書店 1960 年